社会福祉法人 福島県社会福祉協議会

ホットな福祉情報誌

はあとふる ふくしま

2022
9月
No.309

2022年度シリーズ
ふくしまのみらい

暑い日のプールって冷たくて
気持ちいいな。
お水をバシャバシャ、大はしゃぎ！
（すみよし保育園・川俣町）

ZOOM UP 特集

特集
認知症の人と家族を地域で支える仕組みづくり
～認知症サポーターとチームオレンジの取組み～

みらふく MIRAFUKU

シリーズ［未来へつなごう“ふくしま”から］
子育て家庭と地域企業の社会貢献をマッチングする取組み
～社会福祉法人 安積愛育園 キッズスタジオPORTA（ぽるた）～

「はあとふるふくしま」は作成経費の一部に、共同募金配分金及び特別賛助会員の寄付金を使用しています。

目の不自由な方のために「はあとふるふくしま」は音訳版および点訳版を作成しています。

zoom UP 特集

認知症の人と家族を地域で支える仕組みづくり

認知症サポーターとチームオレンジの取組み

9月21日は、国際アルツハイマー病協会（ADI）が世界保健機関（WHO）と共同で制定した「世界アルツハイマーデー」です。9月を「世界アルツハイマー月間」として、この日を中心に認知症の啓蒙活動や普及啓発のためのイベントなど様々な取組みが行われています。そこで今月号では、認知症についてズームアップ。現在、国が進めている認知症の人と家族を地域で支える仕組みづくりと県内での取組みについて、事例を交えながら紹介します。

高齢化の進展とともに認知症の人の数が増加

「2025年問題」という言葉を聞いたことがある方も多いでしょう。2025（令和7）年にいわゆる団塊の世代が75歳以上の後期高齢者となり、その数は日本の人口の約4人に1人にのぼるといわれています。これにより、医療、福祉、雇用など様々な分野に影響を及ぼすことが予想されています。

その一つが、認知症の増加です。厚生労働省の推計によると、平成24年に462万人（高齢者の約7人に1人）だった認知症患者数は、高齢化の進展とともに令和7年には約700万人（高齢者の約5人に1人）に達すると予測されています（図❶参照）。令和元年の国民生活基礎調査では、介護が必要となった原因の第1位に認知症があがっていることからも、家族だけで認知症の人の介護を行うには限界があり、地域全体で支える仕組みづくりが求められています。

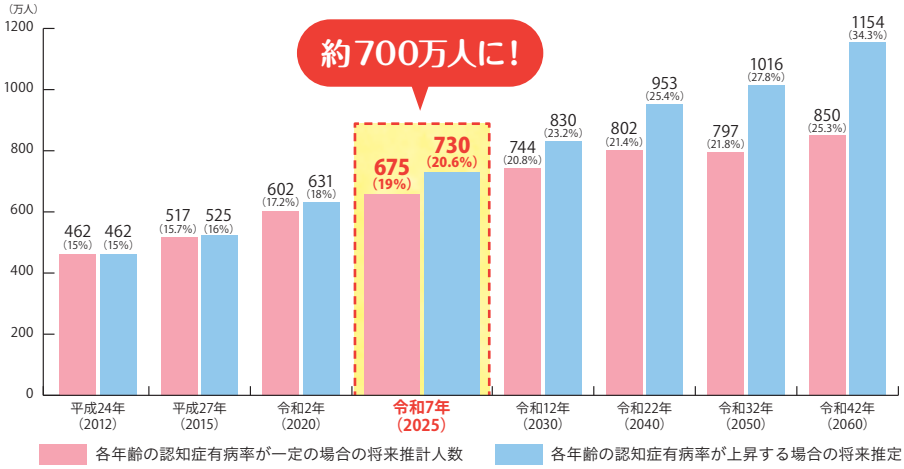
全国に1390万人以上いる「認知症サポーター」とは

こうした社会状況を踏まえ、厚生労働省は平成17年度から「認知症サポーターキャラバン」という取組みを始めました。認知症について正しく理解し、地域や職域で認知症の人や家族を温かく見守る「認知症サポーター」や「キャラバン・メイト※1」を全国で育成し、認知症になっても安心して暮らせる町づくりを目指すというものです。

認知症サポーターは、市町村や企業、学校などで実施される「認知症サポーター養成講座」（以下、講座）を受講すれば、誰でもなることができます。講座では、認知症の症状や認知症の人と家族の気持ちなどを学び、認知症に関する正しい知識を身につけることができます。令和2年度までは認知症サポーターの証として、受講修了者に〝オレンジリング〟が配布されていましたが、令和3年度からは〝認知症サポーターカード〟を新たに配布しているところもあります。

全国キャラバン・メイト連絡協議会によると、令和4年6月30日現在、全国に1390万人以上の認知症サポーターがおり、講座で学んだ知識を活かして、認知症の人の見守りや話し相手など一人ひとりができる範囲で活動しています。

図❶「認知症患者数の将来推計」



「日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究」（平成26年度厚生労働科学研究費補助金特別研究事業　九州大学　二宮教授）

▲養成講座修了者に配布される認知症サポーターカードの例とオレンジリング。認知症サポーターカードは自治体や企業・職域団体ごとに作成し、市町村名やご当地キャラクターが入るなど、様々なデザインがあります。

※1　認知症サポーター養成講座の講師となる役割の人。

「共生」と「予防」を両輪に認知症施策を推進

厚生労働省は、令和元年6月、認知症施策のさらなる推進のためにまとめた「認知症施策推進大綱」において『認知症は誰もがなりうるものであることを前提とし、認知症になっても住み慣れた地域の中で尊厳が守られ、自分らしく暮らし続けることができる社会を目指す』としています。

施策を推進するうえで両輪となるのが、「共生」と「予防」という考え方です。共生とは、「認知症の人が、尊厳と希望を持って認知症とともに生きる。また、認知症があってもなくても同じ社会でともに生きる」という意味。予防とは、「認知症にならない」という意味ではなく、「認知症になるのを遅らせる」「認知症になっても進行を緩やかにする」ことを意味しています。

令和7年度までに全市町村で「チームオレンジ」を整備 認知症の人もチームの一員に

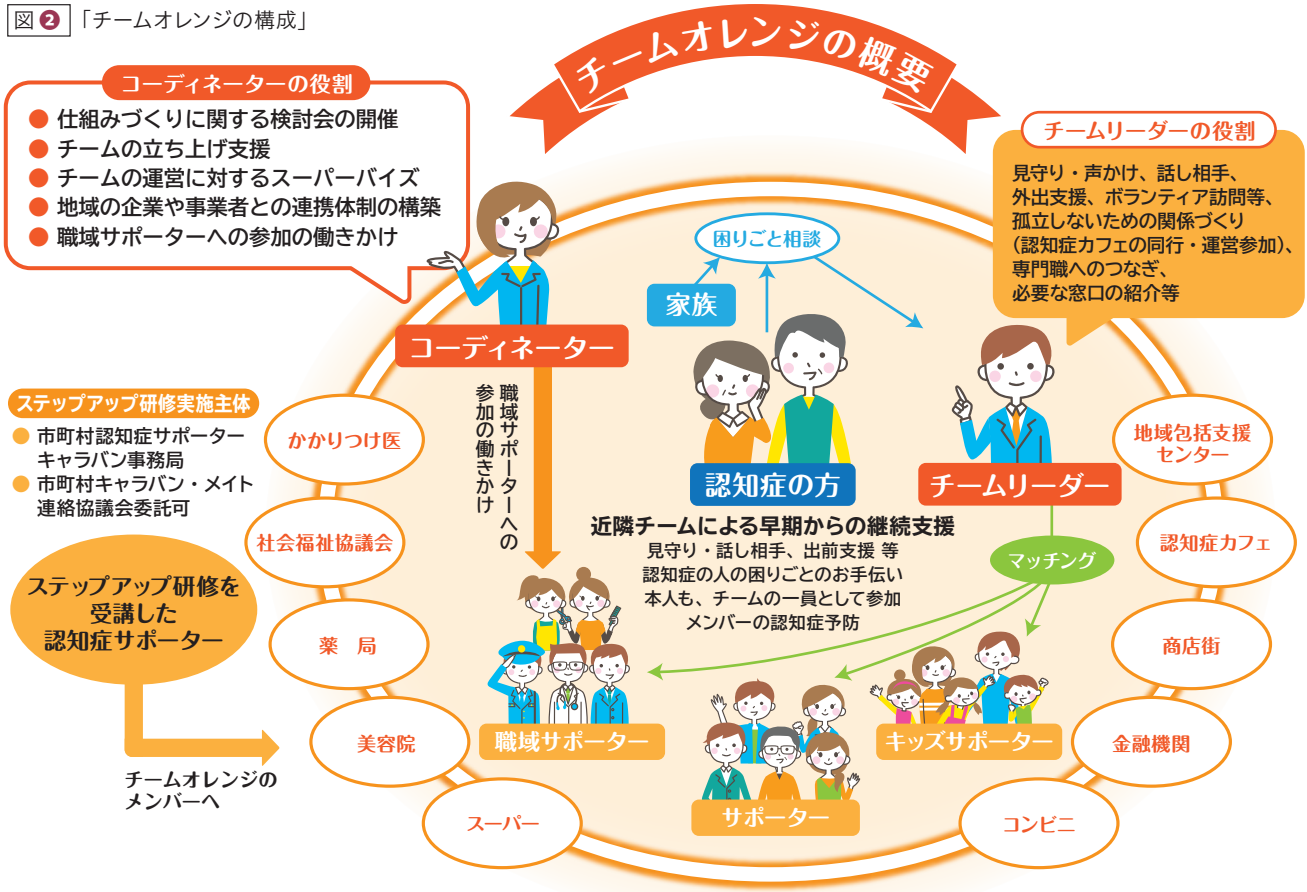
認知症の人が安心して暮らせる地域づくりを進めるため、認知症施策推進大綱では、令和7年度までに全市町村で「チームオレンジ」を整備するという目標を掲げています。

チームオレンジとは、市町村がコーディネーターを配置し、地域において把握した悩みを抱える認知症の人や家族と、認知症サポーターを中心とした支援者をつなぐ仕組みのことです。

図❷のように、認知症サポーター養成講座を受講した認知症サポーターが、市町村などが実施するステップアップ研修を受講した後、近隣のサポーターや警察、配達員など様々な職種の職域サポーターとチームを組み、認知症の人や家族の困りごとのお手伝いをします。見守り、傾聴、認知症カフェへの参加など、地域のニーズに応じて多様な活動が想定されます。

チームオレンジは、認知症の本人も地域づくりの一員として参加していることが特徴です。これまでは「認知症の人＝支援される人」とする考え方が一般的でしたが、チームオレンジでは、サポーターと認知症の人は「対等なパートナー」であることが求められます。認知症の人もチームオレンジの一員ですから、サポーターは当事者である本人の気持ちや考えに寄り添い、共に課題を解決しようとする姿勢が大切になります。

図❷「チームオレンジの構成」



事例

白河市における チームオレンジの取組み

認知症の人や家族と地域の架け橋「あんしんメイト」

平成24年度から始まったあんしんメイト養成講座

県内の他市町村に先駆けて、チームオレンジを設置している白河市。その一端を担うのが、認知症高齢者等ボランティア「あんしんメイト」です。

あんしんメイトとは、認知症サポーター養成講座受講後に白河市のステップアップ研修「あんしんメイト養成講座」を受講した人のこと。「認知症サポーターのフォローアップ研修を実施してほしい、実際にボランティアとして活動できる場もつくりたいという意見が地域住民から寄せられ、平成24年度からあんしんメイト養成講座が始まりました」と、教えてくれたのは、白河市高齢福祉課の笹川園美さんです。

「これまでに79人が受講を修了しています。受講者は60代・70代が中心。介護職や看護師だった方、公務員だった方、主婦の方など様々で、認知症のご家族を介護した経験のある方もいます」と、あんしんメイトの活動日程やメンバー調整を行う認知症地域支援推進員の十文字香織さん。受講修了者のうち、今年度は29人があんしんメイトとして活動しています。

▲白河市保健福祉部高齢福祉課地域包括ケア推進係・専門保健技師の笹川園美さん（左）と認知症地域支援推進員の十文字香織さん

認知症を正しく理解し話し合える場所「あったかカフェ」

あんしんメイトの活動内容は、次の5つ。

①認知症コミュニティルーム「あったかカフェ」の運営補助

②特別養護老人ホームなどへの施設訪問

③個人宅への訪問

④「認知症フォーラムinしらかわ」での寸劇披露や開催補助

⑤「SOSネットワーク模擬訓練」への参加

メインの活動となっている「あったかカフェ」は、認知症のことを正しく理解し、話し合える場所として、平成27年から始まりました。毎月第1・3木曜日に市民交流センター『マイタウン白河』で開催しています。「運営にあたっての事務作業は私がしますが、カフェの内容はリーダーを中心にあんしんメイトさんたちが決め、ミーティングから準備、片付け、反省会まで進めてくれます」と十文字さん。普段は体操で体を動かしたり、おしゃべりを楽しんだりするほか、七夕の短冊やうちわづくり、クリスマス会など季節の行事も行っています。あったかカフェのモットーは「来場者もスタッフも一緒に楽しむ」。認知症の人や家族はもちろん、「誰が来てもよい場所」なのも特徴です。

▲あったかカフェが始まってから一度も休まず参加している92歳の女性もおり、地域の高齢者の集いの場、交流の場となっています

▲コロナ禍以前は、50人以上があんしんメイトとして活動していました。今年度のメンバー 29人の中には86歳の方もいて元気に活動中です

▲「認知症フォーラムinしらかわ」では認知症を題材にした寸劇を披露。認知症への正しい理解と、あんしんメイトの活動を広く伝える機会となりました

ごく自然に支え合う姿こそチームオレンジそのもの

これまでのあんしんメイトの活動について、笹川さんは「コロナ禍でもできること・できる方法であったかカフェを継続できたこと、誰でも行ける場所であり続けたことが一番の成果。あんしんメイトさん自身がやりたいことを提案し、実現

する方法を編み出してくれたことも大きかったですね」と話します。

一方、あんしんメイトという既存の資源を生かしたチームオレンジについて、この形でいいのか悩んだこともあったそうです。そんな時、認知症の心配がある方に対してあったかカフェのスタッフ全員で関わり方を相談し、一緒に考えたうえで最善の方法を選択できたという出来事がありました。「自然に支え合う姿を見て、これがチームオレンジそのものだと再認識できました」と笹川さんは振り返ります。

▲平成26年から始まった施設訪問。訪問先は6ヵ所あり、あんしんメイトが傾聴やレクリエーションなどの活動を行います（現在はコロナによる面会制限で休止中）

早期からの相談・支援につながる地域づくりを

今後の課題は、あんしんメイトの活動や認知症の相談ができる場があることをより多くの市民や関係者に伝えるための情報発信です。また、他市町村の認知症カフェ見学や情報交換を通し、あんしんメイトのモチベーションアップを図りたいといいます。

あんしんメイトの活動や認知症に関する情報が今以上に地域へ浸透し、認知症の方や家族が気軽に相談できる人や場所が整えられていくことで、早期からの相談と支援が可能となり、『認知症の本人も家族も安心して暮らすことができる地域』が形作られていきます。その実現を目指す白河市の取組みは、あんしんメイトの活動のもとで着実に広がっています。

福島県高齢福祉課に聞きました！

福島県内では21万人以上の認知症サポーターが誕生

県では、平成18年度から福島県社会福祉協議会に「キャラバン・メイト養成研修」を委託し、認知症サポーター養成講座の講師役となるキャラバン・メイトを養成してきました。キャラバン・メイトは地域住民のほか、福祉・医療関係者や警察官など多様な職域で働く人を対象に、様々な場所で認知症サポーター養成講座を行っています。その結果、これまでに県内では21万6280人の認知症サポーターが誕生しています（令和4年3月31日現在）。

国の認知症施策推進大綱を踏まえて令和3年3月に策定した第2次福島県認知症施策推進計画「ふくしまオレンジプラン2021」では、令和7年度までに25万人の認知症サポーターを養成するという目標を掲げています。また、学生や子どもなど幅広い世代の認知症サポーターや認知症キッズサポーターを養成し、地域に認知症の理解者を増やすことも目指しています。

研修会の実施などでチームオレンジ設置を後押し

認知症施策推進大綱で示された目標に従い、ふくしまオレンジプラン2021では令和7年度までに県内の59市町村すべてにチームオレンジを整備することを目標に掲げています。令和4年6月末現在、県内でチームオレンジを設置している自治体は郡山市と白河市の2市のみとなっています。

県では今後、市町村や県機関等を対象にしたチームオレンジ研修会や、認知症地域支援推進員※2等を対象にしたオレンジコーディネーター養成研修の実施などを通し、県内にチームオレンジの取組みが広がるよう設置を推進しています。

令和4年6月末現在
2/59市町村

［チームオレンジの設置市町村］

令和7年度までに全市町村に設置!

※2　認知症の人やその家族への相談支援業務や医療機関・介護サービス等の連携支援等を行う人。

社会福祉法人 安積愛育園 キッズスタジオPORTA(ぽるた)

子育て家庭と地域企業の社会貢献をマッチングする取組み

みらふく MIRAFUKU 未来へつなごう“ふくしま”から

▲7月10日に開催された2回目のフードパントリー。妊婦さんや小さいお子さんを連れた方の荷物を運ぶ負担が減るように、感染対策も兼ねてドライブスルー形式にしたところ大好評でした

取材協力
社会福祉法人 安積愛育園
キッズスタジオPORTA(ぽるた)
郡山市安積荒井三丁目348
TEL　080-4292-6287
https://asaka.or.jp/k-porta/

フードパントリーで子育て家庭の食をサポート

社会福祉法人安積愛育園が2017年に郡山市に開所したキッズスタジオPORTA(ぽるた)(以下、ポルタ)は、小学生を対象にした「子ども食堂」と「放課後の居場所」を運営する施設です。食料支援を必要とする方々へ食品を無償で提供する活動「フードパントリー」を地域企業の協力を得て実施しています。

管理者の品川寿仁(しながわとしひと)さんは「子ども食堂を続ける中で、企業さんから食材をいただく機会が増えました。さらに、品質には問題がないけれど規格外で販売できないロス食材を活かせないかというご相談を受けたことが、取組みのきっかけとなりました」と話します。

2020年の冬に開催した初回は、18社の協力を得て、175世帯に配布。2021年は新型コロナウイルス感染症拡大のため延期となりましたが、2022年7月の2回目は、20社の支援のもと、240世帯へ届けました。各回とも、子育て家庭であれば誰でも受け取れるように広く募集。「これをきっかけに、人には言えないけれど実は困っているというような、支援を必要とするご家庭につながればと思っています」とコーディネーターの遠藤祐香(えんどうゆか)さん。保護者の方々からは「コロナ禍で仕事が減り困っていました」「ひとり親なので、助かります」「食品の値上げラッシュで大変な中、ありがたいです」などの声が寄せられました。

▲お米、缶詰、レトルト、お菓子などを段ボールいっぱいに詰めて配布。届ける側の想いをキャッチしてもらえるよう協力企業一覧を掲載したお知らせも同封しました

支援を継続する協力企業の思い

ポルタは、毎週3〜4社の

赤い羽根でささえあい

社会福祉法人 福島県共同募金会
〒960-8141福島市渡利字七社宮111(福島県総合社会福祉センター内)
TEL(024)522-0822 FAX(024)528-1234
メールアドレス　akaihane@axel.ocn.ne.jp
ホームページ　https://akaihane-fukushima.or.jp/

赤い羽根共同募金運動スローガンの入選作品が決定しました！

福島県共同募金会では、共同募金運動をより身近に感じてもらい、ともに支え合う福祉のまちづくりへの関心を高めることを目的に、毎年スローガンの募集を行っております。今年は、1124点ものご応募をいただき、去る6月30日開催の募金委員会において審査した結果、下記のとおり入選作品が決定いたしました。たくさんのご応募をいただき、誠にありがとうございました。
応募期間：令和4年4月1日～5月31日

最優秀賞

少しずつ　優しさもちよる　赤い羽根
石山 真衣（郡山市立安積第一小学校6年）

【特別優秀賞】

赤い羽根　変えるぼくらの　今・未来
須賀 毅（千葉県）

真心が　ともす愛の灯　赤い羽根
石田 賢吾（愛知県）

【優秀賞】

つながる想い　みんなの笑顔　赤い羽根
長谷川 理央（西会津町立西会津小学校4年）

赤い羽根　みんなの心も　ぽっかぽか
渡部 ゆり（西会津町立西会津小学校4年）

踏み出そう　誰かがではなく　私から
有賀 暖南（白河市立東北中学校3年）

支え合い　あなたの募金で　つながる地域
藤澤 緋依莉（福島県立あさか開成高等学校1年）

地域への　思いが届く　第一歩
五十嵐 千夏（福島県立あさか開成高等学校3年）

思いやり　手を取り合って　創る未来
小川 凜花（福島県立あさか開成高等学校3年）

赤い羽根　つながるひろがる　地域の輪
柳沼 美咲（福島県立あさか開成高等学校3年）

つなげよう　優しさの羽根　遠くまで
根本 はな（福島県立いわき翠の杜高等学校2年）

やさしさを　羽根に託して　つなぐあす
大井田 雄策（東京都）

PORTA(ぽるた)は、イタリア語で「扉」という意味。子どもたちの可能性の扉を"PORTA"から拓いてほしいとの願いを込めました。居場所事業では、学習支援やアートプログラム・夜の給食の提供などで子どもたちを応援しています

ポルタ
ホームページ

▲管理者の品川寿仁さん（左）とコーディネーターの遠藤祐香さん（右）。お子さんたちやご家族の喜んでいる姿、感謝の声が活動のパワーの源となっているそうです

企業から提供される冷凍食品を、郡山市内の子ども食堂や放課後児童クラブに配布する活動も行っています。

この活動に参画し、積極的に支援を行う企業の一つが、株式会社ヨークベニマルです。大型冷凍庫を寄贈したほか、規格外の食材や商品券などの寄贈を続けています。デリカ事業本部顧問の熊田正巳さんは「社会に役立つことをしたいという思いと、食品ロス削減を通じてSDGsへつなげる取組みがちょうど一致しました。ポルタさんに食材を届けると、必要とする子育て家庭や子ども食堂へ配ってもらえるのでありがたいです。子どもたちから届く感謝のメッセージが励みですね」と話します。企業が地域とつながり、社会貢献が継続できる仕組みをつくっていけたらと、今後を見据えています。

ポルタはこれからも、フードパントリーを小さい単位で回数を増やして開催するなど、ニーズに合うよう変化させて継続していきたいとのこと。支援に繋がりにくい家庭に届けるための工夫も模索中です。品川さんは「支援をしたい企業と子ども食堂や児童クラブなどをつなぐ、拠点としての役割をさらに推進し、他の地域にも広めていきたい」といいます。「子どもたちの成長をみんなで見守り、その子どもたちが大きくなったときに今度はサポートする側にまわるというような、人々が笑顔になれる地域を作っていけたら」と遠藤さんは希望を語ります。

発行・企画編集　社会福祉法人 福島県社会福祉協議会
TEL(024)523-1251　FAX(024)523-4477
https://www.fukushimakenshakyo.or.jp
E-mail　heartful@fukushimakenshakyo.or.jp

※本誌に掲載の記事・写真・イラストの無断転載・複製を禁じます。
発行日／令和4年9月15日
制作・印刷／(株)民報印刷

県社協からのお知らせ

『ふくしま保育ナビ』のご紹介

福島県保育士・保育所支援センターでは、保育のお仕事に関する相談をお受けしたり、保育施設と求職者のマッチング支援を行っています。県内の認可保育所・認定こども園の魅力を紹介するため、「ふくしま保育ナビ」を開設いたしました。種別や市町村エリアなど様々な条件から検索でき、詳細な施設情報を掲載していますので、ご覧ください。
※情報は登録時の内容となり変動する可能性があります。

ふくしま保育ナビの特徴

① 便利な機能で自宅から近い施設が検索できる！
② 施設の特色や見学の可否など就活に役立つ情報も掲載！
③ スタッフが就職に関することなどのご相談に応じます！

https:/ /f-hhc.com/navi/
ふくしま保育ナビ　検索

お問い合わせ先
県社協　人材研修課
福島県保育士・保育所支援センター
TEL024-521-5662

クロスワードにチャレンジ！

正解者から抽選で3名にプレゼントが当たる

➡ ヨコのカギ

1. 色彩が豊かであるさま
2. ○○○○○キューブで6面揃えるのは難しい
3. 笑う○○には福来たる
4. ⇔ 凹
5. 他の人のツイートに対して返信すること
7. すり減ること
10. 「にこにこぷん」のネズミの男の子
11. 田んぼにいる巻貝

⬇ タテのカギ

1. 「なごり雪」の歌手
4. 十番目の干支
6. 行程表
8. ○○が鷹を生む
9. 正六面体
12. 海賊旗に描かれているもの
13. 荷物をのせて人力で引く車

1 D	6	8	9	12	
2 F					■
3		■	10		13
■	7	B		■	E
4 A		■	11	C	
5				■	

全部できたら二重ワクの6文字をABC順に読んでいくと、それが答えです。

今月のプレゼント
地域生活サポートセンター
エル白河
（白河市・就労継続支援B型）
焼き菓子の詰め合わせ
当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。

応募方法　ハガキまたはEメールにパズルの答えと ①住所、氏名（ふりがな）、年齢、電話番号、業種 ②本誌に対するご意見、ご感想、ご要望を全てご記入の上、ご応募ください。
締　　切　令和4年10月14日（金）
宛　　先　〒960-8141 福島市渡利字七社宮111
社会福祉法人 福島県社会福祉協議会
「はあとふる・ふくしまパズル係」

メールでのご応募はこちら！

※ご記入の個人情報は適切に管理し、目的以外に使用しません。
※本誌に対するご意見、ご感想、ご要望の一部は、「読者のおたより」に掲載させていただく場合もございます。

A	B	C	D	E	F

7月号の正解
ボランティア

多数のご応募ありがとうございました

編集後記

先日、認知症ご本人の話を聞く機会がありました。「支援者から困りごと何？って聞かれても困りごとはすぐに思いつかない。普段の会話から困りごとを拾ってほしい。だから支援者と当事者の関係ではなく、友達のように話がしたい」。支援する側とされる側の関係を超えるとは、この話にもヒントが隠されているのではないかと感じました。（人材研修課　二本松事務所　丹治陽平（たんじ ようへい））

7月号への読者のおたより

瓜生岩子さんという名前を初めて聞きました。どんな人で何をした方なのか、何も知らず調べてみたいと思いました。はあとふるふくしまでも簡潔にとりあげていただくと功績が分かると思います。同じ福島県人として知らないと残念です。
（43歳　製造業）

毎回楽しみに読ませていただいております。ありがとうございます。
（42歳　介護職）